

本園の言語指導の基準

—〈島根大学教育学部付属幼稚園〉—

序

言語は、意志を通じ合う道具として、社会生活をして行く上に、欠くことのできないものである。このことは既に常識であって、今更言うまでもないことであるが、「ことば」の持つ意義は、単なる道具としての意味を越え

舟 木 哲 朗

た、極めて広く、且深いものがある。それは、ことばは直接に思惟と結びついている、ということである。だから、ことばの教育は、それがそのまま、人格形成に連なる問題として再検討されなければならない。幼児期の言語発達が立後れた者は、学童期になって、その克服に非常に困難を感じるだけでなく、彼的人格形成に、重大な影響のあることが明らかにされているが、幼稚園における言語指導は、専ら「話しことば」であり、文字のように明確な形を残さない

ので、従来、教育の盲点になっている。幼稚園における言語指導は、勿論、幼児のごく自然な遊びを中心に行われるべきだし、一定の教科書を用いたような、型にはまった話込みであってはならない。けれども、教師が、一応の基準を持っていることは必要で、この基準を考えながら、実際の指導に当って

は、基準をナマのまままで出すのではなく、いろいろな活動の中へ巧みに織込み、個人差に応じた指導がなされなくてはならない。又、言語指導は、音楽リズムとか絵画製作といった、比較的まとまった活動と異り、あらゆる教育の場が、ことばを使いながら発展しているので、教育全般を通して、言語指導の一貫した方針がうちたてられる必要がある。

そこで、私共の園では、「言語」という、特定の活動を考えるのではなく、園における、幼児のすべての活動を通して、言語指導は如何なる基準において行われるべきであるか、という問題を取上げ、一昨年、一応の試案を作っている。

試案は次のようにして作られた。

- 1、幼児の言語発達に関し、広く文献から資料を求め、これを整理する。
- 2、本園園児の実態調査を行い、右の結果を、本園に適合するように修正する。
- 3、「幼稚園教育要領」「小学校学習指導要領 国語科篇」などを参照し、これを右の2と比較対象しながら、指導の基準を作る。

このようにしてでき上ったのが、第一表および第二表で、また試案の域を脱していないが、本園の言語指導の基準線を、一応ここに求めている。

一、言語の発達から見た

幼稚園児

生後六カ月頃にはじまる無意味な発音から、満一才前後にはじまる一語文、満一才半以後にはじまる二語文を経て、満三才頃に至る間を、言語の発達における、一つの段階として把握することができる。この時期に、語いや文章の形式が著しく発達し、何とか一通り話せるようになる。幼児の、言語についての関心が、語いの習得やその使用に集中され、模倣の盛んな時期で、言語の基礎的練習期である。

語いの発達という点から見ても、形式の発達という点から見ても、三才という時期は、明らかに一つの転機である。四才頃から、幼児語が急速に消失しはじめ、これまでに培われた言語力が、盛んに外に向って発動される

ようになり、獲得された能力の自発的使用に急で、文章の形式は、却って乱れて来る。

又、四才以後は、語いの増加量が年々減少する。このことは、幼児の、言語についての関心が、これまでとは異った方向へ移ったことを意味する。この時期の幼児が空想的であることから、たわいもないことを、考えたり言ったりすることも特徴的で、この時期が、ちょうど幼稚園期に当る。このような状態は、小学校低学年にも持越され、満七才頃になってもまだ自己中心的で、一つのテーマに基く討論などできない。現実と空想とがはっきり分化し、抽象的な意味の理解が可能になり、一つのテーマに基く討論ができるのは、満八才以後である。

このように、幼稚園児の言語生活が、それ以前とは質的に異った段階に発展しており、やがてその後に来る段階とも、又、質的に異ったものであるとすれば、そこには、当然その特性の上に立った、適切な指導が要請される。

二、発達の特性と必要

言語の発達から見た幼稚園児の特性は、右の通りであるが、更にこれを細かく掘下げた上で、言語指導の具体的な目標を設定する必要がある。同一年令でも、保育年数によって、発達の様相に、幾分の差異が認められるが、ここでは、二年保育児を中心に考えることにした。

第一表は、発達の特性と、それに応ずる教育の必要をまとめたもので、一般的傾向、語いの習得、および語いの駆使力は、ごく自然な状況で、普通の幼児が到達する段階である。若しこの段階に到達していない幼児があれば、その原因を診断し、必要な処置をとる。例えば、身体的、或は情緒的な原因による。言語障害児に対しては、言語そのものよりも、その原因となる条件に治療を加える。家庭の無理解で幼児語から脱却しないとか、或は正しいことばが使えない幼児に対しては、むしろ保護者への啓蒙に努めるし、知能の低い幼児に対しては、あせらずに、特に

経験を豊富にさせることに留意する、等がこれである。指導上の留意点は、発達の特性に對する必要を意味する。これは、その年令相應の発達を遂げた幼児について示したものであるから、当然個人差に應じた配慮が必要になつて来るが、一応、四才として示したものは年少組に、五才として示したものは年長組に適用し、三才までとして示したものは、普通の幼児にあつては、入園前にできてゐる筈ではあるが、四月の入園当初に取上げることにしてゐる。

三、言語生活の場と指導

上の留意点

発達の特性と共に必要なのは、幼児が、どのような場面でのような言語生活をしており、且、それに対して、どのような指導がなされるべきか、ということである。第二表は、幼児の言語生活の場を中心にとめたものであるが、この中に挙げたものは、年少組、年長組を問わず、幼児の個人差に應じて、絶えず発達を助長すべきものとして考へてゐる。

これが幼児の発達程度に應ずる取上げ方については、十分に考へなければならぬが、一応、カリキュラムを構成するにも、指導を行うにも、いやしくも、言語の指導を考へるには、必ず考慮に入れておかなければならぬと考へられる事項である。

四、カリキュラムの構成

幼稚園におけるカリキュラムは、当然園児の生活の全分野にわたらなければならぬし、且、六つの領域がばらばらにならないように、一つに融け合つていなければならぬ。そこで、他の領域と無關係に、言語だけのカリキュラムを作つていふようなことは、到底考へられない。それで、本園では、先ず第一表においては、年令による言語指導の重点をおさえ、第二表においては、それぞれの発達程度や個人差に應じつつ、しかも一貫してねらうべきものとして、これらのものがある効に展開されるように、幼児の活動を考へ、幼稚園の全生活の中における、言語指導の位置づけを決定した上で、年間のカリキュラム

を構成してゐる。

おわりに

以上述べたことは、本園における言語指導に、一つの見通しをつけるために作った基準であつて、幼稚園における活動が、このような要素を強く押出した、いわゆる、エッセンシャルリズムになつてゐるのではない。ただ、前にも述べたように、「話しことば」の指導は、とかく教育の盲点になりやすく、特別のむずかしさがあるので、平素の教育実践に當つて、何かはつきりしたものを持つことの必要を痛感し、一応の試案としてまとめたものである。従つて、平素の指導は、特別に「言語」として、困苦しい、「国語科の授業」といった感じのものをやつてゐるわけではなく。この試案は、且下検討中で、将来はもっと充実したものに改訂したいと考へてゐる。大方の御批判と御指導を仰ぐことができたら幸である。

(次に第一表、第二表を掲げる)

第一表 発達の特性と教育の必要

項目	年齢 1 ~ 3 才	4 才	5 才
一般的傾向	アニミズム 自己中心的 思考は直接的現在の 有意注意の力が乏しい 或程度観念的思考ができる	アニミズム 自己中心的 現実と空想が未分化 有意注意の力が乏しい 示された特性を絵の中で指摘できる	アニミズム 自己中心的 現実と空想が未分化 過去現在未来の区別がつく ことばでかんたんな推理ができる
語いの習得	語いの増加量が年々増す 名称に興味を持ちよくおぼえる 姓名が言える 自分を第三人称で呼ぶ	語いの増加量が減少する 身近のものの名が言える 流通している金銭の名が言える ボク、アタシが言える	語いの増加量が減少する 語いの把握は直観的自括的である 右と左がわかる 敬称が正しく使える
語いの駆使力	話しことばの発達が著しい 動詞形容詞の語尾変化を習得する 幼児語を使う 文章の長さが急激に増す 単位時間に話す文章の数が急増する 従属文を伴う文が多くなる 質問に対してじゅうぶんに答えられない	話しことばが一応完成する 助詞が完全に使える 幼児語がなくなる 文章の長さが僅かに増す 単位時間に話す文章の数が僅かに減少する 従属文を伴う文が減少する 応答はハイかイエエだけ	話しことばが自由に使える いろいろな品詞を使う 共通語を理解する 文章の長さが僅かに増す 単位時間に話す文章の数はあまり変らない 従属文を伴う文の数はあまり変らない かんたんな説明ができる
指導上の留意点	いろいろなものに接する機会を作り語いを増すようにしてやる うさぎがらずに話の相手になってやる 正しいことばを聞かせる 動詞形容詞の語尾変化を習得させる 姓名が言えるようにする	自由な遊びの中でひとりひとりに行渡るような指導をする 不安を取除いて自由に話せる雰囲気を作ってやる 幼児語から脱却させる 代名詞を使わせる 来客へあいさつができるように導く 日常のあいさつができるように導く ハイ、イエエがはっきり言えるようにする 相手にわかるように話させる 童話や紙芝居は幼児の現在の生活に通ずる平易なものがよい	大勢で話を聞いたり数人で仕事の計画を話し合ったりできるように導く 必要なことを選んで話せるように導く 共通語を理解させる 敬称が正しく使えるように導く 「ごめんさい」が言えるように導く 感じのよいあいさつができるように導く かんたんな伝言をさせる 人の前で自由に話すようにさせる 童話や紙芝居は空想的なものや昔話が良い

第二表 言語生活の場と指導上の留意点

項目 場	方 法	内 容	指 導 上 の 留 意 点
聞くだけの場面	<ul style="list-style-type: none"> ひとりで聞く 大勢で聞く 友だちから聞く 先生から聞く 家人から聞く そのほかの人から聞く ラジオやテーブコーダーで聞く 	<ul style="list-style-type: none"> 自然音や鳴き声を聞く さまざまな人の声を聞く あらたまった話を聞く 伝言やさしずを聞く 人の経験発表を聞く 劇映画、紙芝居、人形劇、童話などを見たり聞いたりする 話し合いを聞く 	<ul style="list-style-type: none"> 聞く知覚の働きを正確強大にするように導く 簡単な語いを理解させる 的確に聞き取らせる 要点をとらえる力を伸ばす 正確な表現を聞かせ批判的に聞く力を伸ばす 話す人をよく見姿勢をよくして聞くように導く
話し聞く場面	<ul style="list-style-type: none"> 一対一 一対多 多対多 友だちと話し合う 先生と話し合う 家人と話し合う その他の人と話し合う 	<ul style="list-style-type: none"> あいさつや応答質問をする 見たこと聞いたことを話し合う 日常生活で話したり聞いたりする 遊びや仕事の計画を話し合う 遊びの中で話し合う 	<ul style="list-style-type: none"> 話しを終わりで注意深く聞けるように導く 大勢で静かに聞けるように導く 人の話がすむのを待って話しかけるように導く
話す場面	<ul style="list-style-type: none"> ひとりの相手へ話す 大勢の相手へ話す 友だちへ話す 先生へ話す 家人へ話す その他の人へ話す 	<ul style="list-style-type: none"> 見たこと聞いたことを話す 伝言やさしずをする 日常生活で話す 絵を見て話す 劇遊びをする 紙芝居などをする 	<ul style="list-style-type: none"> 経験を組織する力をつける 幼児語を使わぬようにする 簡単な語いが正しく使えるように導く 主述のはっきりした話し方ができるように導く 語尾をはっきり話すように導く 静かな調子のよい必要な程度の声で話すように導く 俗語や悪いことばを使わぬように導く 人の前でも臆せず話せるように導く
話す遊びの指導過程	<pre> graph TD A[自由な話] --> B[経験発表] C[自由画] --> B D[絵を見て話す] --> B E[自由遊び] --> F[ごっこ遊び] G[リズム遊び] --> H[模倣によるリズム表現] I[いろいろなことば遊び] --> J[劇遊び] F --> K[紙芝居の製作演出] H --> K J --> K </pre>		